とかす力(八木重吉の詩を愛好する会会報)

☆ 第 26 号

★2022 年 (令和 4 年) 12 月 25 日 発 行

★ 2022 年、3 年ぶりの茶の花忌

前日までのはっきりしない天気から、快晴の青空が戻って来ました 10 月 26 日、3 年ぶりの茶の花忌の催しが相原の生家で開催されました。もう慣れっこになって来たとはいえコロナ対策は十分にとるという事で、八木重吉記念館の見学は中止とし、受付そばでの書籍販売も『八木重吉英文日記』と日本基督教団が編集した詩集『八木重吉家族を詩う』だけに限定しました。

12 時半から墓前に移動しての礼拝は、今年も牧野信次牧師の司式で進みました。今年8月に日本基督教団出版局から出た『八木重吉家族を詩う』を紹介している『信徒の友』10月号の記事が配布され、家族を愛した重吉の姿が語られると共に、昨年力説された〈仰噡〉の信仰を深めた話をするために次の詩を引用されました。

きりすと/われにありとおもうはやすいが/われみずから/きりすとにありと/ほのかにてもかんずるまでのとおかりしみちよ/きりすとが わたしをだいてくれる/わたしのあしもとに わたしが ある

〈キリストの内在〉と言われるようですが、信仰の深みを求めてキリストに向かう重吉の心がこの詩によく表現されており、「とおかりしみち」と感じている重吉の姿に、八木重吉の信仰の真実さ、深さが示されています。 重吉のみならず弱く罪深い私たち人間は、やさしく抱き留めてくれるキリストを仰ぐしかできない。それが〈仰噜〉の信仰であると、牧野牧師は、私たちに語ろうとしているのではないかと感じました。

13 時からは、生家の庭へ移動しての「八木重吉を偲ぶ会」が、今年も地元の愛好家の青木幸雄さんの司会で始まりました。まず今年 1 月 14 日に亡くなられた加藤正彦氏(加藤武雄の甥で茶の花忌実施のために尽力されてきた)を追悼して黙祷の時を持ちました。続いて茶の花忌準備委員長の詩人八木幹夫氏が、「重吉さんと良寛さん」という演目で話されました。重吉の「鞠とぶりきの独楽」から〈あかんぼが〉〈ぽくぽくひとりでついでいた〉〈ぽくぽく〉の3 詩をとりあげ、〈この里に手鞠付きつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし〉と歌った良寛とに通じ合うものがあると指摘し、それは子供の純真な心のようなもの、大災害にも動じず死の覚悟が出来ている心、怒りや悲しみなどの世の煩いから解き放たれた無心の心ではないかと、私たちに教えてくださいました。

講演の後は、気分を少し変えて歌の時間となりました。国立のギャラリー「ビブリオ」の運営者十松弘樹さんの企画によって、八木重吉の詩の歌唱とギター演奏を、大阪在住の女性 YO-EN さんがしてくださいました。〈うたうときは〉〈まり〉〈女〉〈春〉〈おほぞらの水〉の5曲を、語りを入れながら歌い上げました。従来、ソプラノやアルトの声、あるいは合唱で歌われることが多かった重吉の詩が、ギターの弾き語りで歌われ、新鮮な感覚を持った人もいたかと思います。演奏場面の動画を作成したとのことで、URL と QR コードを紹介しておきます。

https://www.youtube.com/watch?v=UXvC-5XlTV





続いて私(小林正継)が、八木重吉の詩を愛好する会及び茶の花忌準備委員会の事務局の立場から、二つの資料を提示しながら報告をさせていただきました。一つは 10 月 1 日に発行した愛好会活動のまとめ『八木重吉を慕いて』です。37 年にわたる会の活動をまとめた冊子で、柏の様子を伝えまた全国のゆかりの地の情報を分かり易くまとめていますので、みなさんに八木重吉に関する総合的な資料として役に立てることが目的でもあると話しました。もう一つは、茶の花忌の歴史をまとめた一覧表です。記念館が出来る前までは主な偲ぶ会として行事、記念館が出来てからは、毎年の実施内容を短くまとめてあります。どうしてもまだ記入しきれない年もあるのですが、今後の皆様からの情報提供によってさらに詳しくまとめていく予定です。加藤正彦様が語っていた「茶の

花忌参加者に何か還元できる資料をまとめたい」という要望に少しは答えられたかなと思いました。

そのあとは、地元の朗読サークル「ちえの環」の会員二人による重吉詩の朗読です。重吉の詩のことばを直接 聞いて味わうのはやはりいいものです。じっくりと聞きいりました。

次に、地元の町田市民文学館で、いつも記念館を応援して下さっている学芸員の神林由貴子氏が、文学館の活動の中で常に八木重吉と記念館に関心をもって活動して下さっている様子を話してくださいました。

最後に現在の八木重吉記念館の館長八木明男氏(千葉県で医療に従事されているため、普段の記念館管理者はご母堂の佐藤ひろ子氏)が、重吉が熱烈なラブレターを登美子夫人に送った事実に感動したことから、八木重吉に興味を持ち始めた事を語り閉会の挨拶とされ、15 時少し前に催しは終了しました。50 余名の参加者で、会場準備の方々を含めると60 名ぐらいの方が集って下さったと思います。3 年ぶりの良い集会になりました。

★八木重吉の詩を愛好する会の37年間の活動史をまとめた冊子『八木重吉を慕いて』が完成

1985 (昭和60) 年に結成された「八木重吉の詩を愛好する会」は、37年を越えました。初期の多彩で活発な活動がだいぶ縮小されましたが、会報やホームページを通して情報交換や交流が出来、励みになっています。

柏で生まれた「八木重吉の詩を愛好する会」は、初期にゆかりの地を訪問したり、詩碑の見学に行く計画を立てて活動してきたので、37年の間に、多くの情報保有者が亡くなられたとはいえ、できるだけ記録してきたものが積み重なりました。これをまとめたものが『八木重吉を慕いて』です。2012(平成24)年に『柏時代の詩人八木重吉』を発行していますが、今回、その改訂を基本に、それ以前に発行した『八木重吉詩碑建立記念誌一柏と詩人八木重吉』と『いっぽんのみちー10 周年記念誌』の重要な情報を加え、さらに全国的視野からの情報を後半に加え、八木重吉の人物像を総合的に把握できるようにしました。すでに多くの方々に贈呈し、購入もしていただいています。さらに欲しい方は、会報編集室の私に連絡いただければ1 冊 1000 円で頒布します。

★加古川の清水嗣子さんからの便り

加古川に住み、御影の重吉に興味を もって資料を提供して下さって来た 清水嗣子さんから、お知り合いで、 神戸新聞の編集委員を長く務め、

〈兵庫県文化の父〉と称された詩人、 文芸評論家の宮崎修二朗氏(98歳 で没)についての記事が送られてき ました。

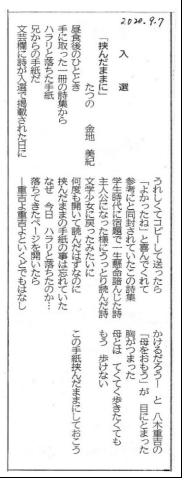
愛好会のメンバーがかつて御影を 訪問した折り、宮崎さんが八木重吉 についても、兵庫ゆかりの文人とし て発掘することに熱心で清水さんに いろいろ新聞記事を提供して下さっ ていました。

その宮崎さんが2年前に亡くなられた時の新聞記事(次ページ)と、神戸新聞に掲載された、八木重吉愛好者が詩で重吉を紹介している記事(右)を紹介します。

(切り取ってまとめました) 御影中学校の詩碑訪問時の写真も再 紹介しておきます。(右端が清水さん) 

御影中学校にある詩碑「夕焼」と愛好会 平成5年 窪田哲夫さん撮影(地元のカメラマン)

重吉の詩に感じてうたった詩2つ



の創設に関わるなど、その

掘を目指し「のじぎく文庫」 庫ゆかりの作家や著作の発 つ、と。ところが翁は、兵 考えつくことではないだろ

た。20歳に満たない若者が

わたしは信じられなかっ

兵庫県文苑の最長老、 触媒」として生き抜いた 子となって三十数年にな

なっている。 の花まづ砕けたり」は、 崎修二朗翁がお亡くなりに なった。98歳だった。 化研究に欠かせないものと として自他ともに認められ た人。残された師の伝記「人 に詩人、富田砕花師の門番 わたしが宮崎翁の知遇 兵庫県文化の父と称され

んを悼む 3

言葉に深い感銘を受けた のではありません」という

とは名利を求めるためのも

いた時。もの書く者の心得 を話されたのだが、「文芸

を得たのは、ある講演を聞

のだった。以来押しかけ弟

今村欣史

たことがある。

う、偉くならなくてもいい を聞き、自分はこれでいこ 烈な劣等感に襲われまし と思えるようになりまし の"触媒"についての講義 の余りのレベルの高さに強 に立てればいいじゃないか じゃないか、人さまのお役 た。そんな時、 (後に国会図書館館長) 岡田温講

・筑波大学)時代に、周り こんな話をしてくださっ 「文部省図書館講習所(現 後の人生を「触媒」 るのだが、その全てが世の る。自らを世に出そうと ため人のためのものであ 生き抜かれたのだ。 じめ50冊に余る著書があ して書かれたものは一冊も 翁には「環状彷徨」

今村欣史さん=2014年(今村さん提供)

III : れてあった。 きてきました。もう死んで

宮崎修二朗さん(右)の歩みを聞き取る

43年生まれ、西宮市出身。 兵庫県現代詩協会会員。

いまむら・きんじ

お話を伺ったが、最後にこ たのは2月6日。 すでに体 たままの翁から30分ばかり 調が思わしくない中、お許 しを得て、ベッドに横臥し わたしが最後にお会いし

んなことをおっしゃった。

「おかげさまで楽しく生

も恐らく駄目でしょうな らの要請で、わたしが差し う一冊、本を出したい。で も本望ですが、その前にも へれた原稿用紙の束が置か ベッドの傍らには、翁か

にも宮崎翁らしい。 は行われず、神戸大学医学 部にご献体となった。いか こ遺言通り、葬儀・告別式 4月1日死去。かねての

も務めた。 2010 4.2

多数。「神戸史学会」の代表

の花まづ砕けたり」など著書

去、98歳。長崎市生まれ。葬のため芦屋市内の病院で死のため芦屋市内の病院で死 地域文化の発信に尽力した。 わった。柳田国男の自伝「故「のじぎく文庫」の創設に携 儀・告別式は行わない。 郷七十年」を刊行するなど る作家や著作の発掘を目指し しゅうじろう―文芸評論 冨田砕花について記した「人 を務め、兵庫県に関わりのあ 神戸新聞社で編集委員など

★「詩と辿る八木重吉の世界」の紹介

茶の花忌で「八木重吉を偲ぶ会」の司会を担当してくだった青木幸雄さんが関係している、「町田法人会」が発 行している広報誌 Kasasemi (翡翠) に、町田市民文学館の神林由貴子さん監修の「詩と辿る八木重吉の世界」 が掲載されました。最初は「素朴な琴」ですが、今後シリーズで八木重吉の詩が紹介されていくとのことです。 郷土で愛され続けていく事は自然なことです。町田周辺に愛好者が広がっていく事を願っています。



ひとつの素朴な琴をおけ 秋 素 0 0 朴 明るさのなか 美しさに な琴 かに 鳴 耐 りいだすだらう へか

ば

ね

貧しき信 徒



されています。重吉の妻・登美子がこよなく愛 うたわずにはいられない重吉の心が んだ理由を登美子は「重吉の愛した故郷の澄み 女の希望でこの詩が刻まれています。この詩を選 した詩でもあり、八木重吉記念館の詩碑には彼 き信徒』所収。自然の美しさへの感動・感 空間のなかに、これがもっともふさ 没後刊行された第二 から詩作を始め、二十七才で第一詩集 町 ・簡潔なことばで綴りました。二十四才の頃 その純一な心情を平 九二七) は、キリス

二十九年の短い生涯の中で三千編もの その詩は今なお多くの人に愛誦され

一秋の瞳



監修・町田市民文学館ことばらんど 神林 由貴子 八木重吉記念館 町田市相原町4473 ※現在は休館中です

★野坂孝さんより、面白い貴重な文章が提供される。

八木重吉の弟の野坂純一郎氏の(故人)子息である、野坂孝氏より〈野坂大尉の文章〉という資料を頂きました。詳しい経緯は不明ですが、故八木藤雄氏が野坂宅に持参したものを、野坂家で保存しておいたようです

私は戦時中、近衛三連隊で大隊長朝香宮孚彦王殿下のもとで中隊長を勤めた野坂大尉である。月に 2,3 回は 皇居の守衛勤務に当たり、おそれ多いことながら、昭和天皇始め、ご幼少の頃の今上陛下の御殿のご守護の役を 勤めてきた。不思議なご縁ではあるが、私が理科・数学の教師として聖心女子学院在任中、正田美智子さまが生 徒としておられたわけである。尚、学院勤務中、私はカメラマンとして校内外の写真の撮影・報道に関係してお り、昭和 34 年のご成婚当時には、学生時代の美智子様のお写真(野坂撮影のもの)がいろいろ報道され、私自 身もテレビに出演したことがある。

最近は、毎年10月20日皇后陛下のお誕生日の記念パーティーにご招待にあずかり皇居に参内している。その席上、招待者代表として聖心女子学院管区長(シスター奥井)がお祝いの言葉として「キリスト教詩人八木重吉」の話を述べ、両陛下は大変興味深く、思召したことがあった。あとで私は陛下に「私は毎週頴明館高校通勤の途中、八木詩人の記念館前を通り、詩人の甥八木藤雄氏に時々お世話になっております。尚、その詩人の弟は野坂純一郎と申し、私野坂とも親戚になるようであります。」と申し上げると、陛下も何か不思議にお思いのご様子でした。

その後、私は手作り本「詩人八木重吉のことども」を井上女官長に送り、陛下にお目にかけて頂くようお願い した。詩人の弟野坂純一郎夫人(とみこさん)の実家は、私の同郷「青森県上北郡野辺地町の有名な醸造家「屋 号ヤマサン野坂」として知られる家。

尚、51頁の写真は30年位前、本郷の諸井家で私が撮影したもので、お三人は、故郷野辺地町の大正時代の「名家仲良し三羽鳥」として知られ、野坂とみこさんは、青森県津軽の名家「太宰治家(津馬家)」とも親戚になる。中央の諸井てつ子さんは、日本商工会議所会頭諸井貫一夫人で、生家は二回に及ぶ明治天応東北ご巡行の折り、行在所になった野辺地町、屋号リュウゴイチ野村家」の出身。中村うめ子さんは、私野坂のいとこで、恩師であり、父上は銀行の支配人であった。老後は故郷で過ごし、今春(平成12年5月)帰郷した私は、元気な97歳の中村うめ子さんに会い、楽しい話に時を忘れる程であった。ところが、この7月30日、突如帰天の知らせを受け、急ぎ故郷を訪ね、8月3日の野辺地町教会の告別式礼拝に参列した。家族の話によると故人は呼吸を引き取るまで、平常と変わらず、極めて穏やかに眠るような帰天であったという。子供時代からの厚い信仰によるものといえよう。

(備考) 詩人八木重吉の甥八木藤雄夫妻は、詩人の心を心とし、特別行事を企画するなど、立派に「八木重吉記念館」を守っている方である。見学ご希望の方、詩人についていろいろお伺いしたい方は夫妻にお願いしてみてはいかがでしょうか。八木藤雄氏の住所 〒194-0211 町田市相原町 4473

野坂純一郎氏と親戚関係にある野坂大尉という事しかわかりませんが、天皇に八木重吉を紹介しようとしたことが興味深く、もしかしたら天皇が読み、皇室関係者が読み、八木重吉の詩を良く知っているかもしれません。ついでに皇室との関係を語ると、私(小林)の大学院修士課程の指導教官が、今の上皇后である美智子様に英文学の講義を家庭教師のような形でされたことがあると、授業の中で語ったことがあります。元々美智子様は聖心女子大学文学部英文学科を卒業しており、またイギリス王室と関係の深い日本の天皇家であってみれば、英文学を教養として学んでおきたかったのでしょう。

★西宮の詩碑「幼い日」の建立経過について

西宮の八木重吉の詩碑「幼い日」は、夙川公園の片鉾池がある場所に建てられており、詩碑の中では最も広い敷地内にあり、誰もが自由に入って自由に見ることが出来ます。この詩碑のそばで子供が自由に遊んでいる光景が意図されていたようです。それは建立された 1980 年が国際児童年だったことと関係しています。西宮地域にある戎ライオンズクラブが創立 10 周年記念に当たり、社会貢献を考えて国際児童年にふさわしいものを建立する計画が立てられた時、西隣の芦屋市にある芦屋教育研究所に勤務する岩城康隆さんに話が持ち込まれたようです。岩城さんは中学校の国語教師で元々教育や文学作品に興味がありましたが、このころは教育所勤務で兵庫県全体の教育や文化発展を考える仕事をしていましたので、八木重吉の詩碑建立がひらめいたようです。それというのも、岩城さんは御影師範学校の卒業生で、8年前の昭和 52年に建立された御影の詩碑「夕焼」の事を良く知

っていました。御影を訪問した時お世話になった猿丸さんや藤原さん、飛松さん、門脇さんらと同じ御影師範の卒業生ですから、当然協力していたのです。教育現場から教育界を広く知り学ぶために、地域あるいは県全体を管轄する教育所のような職場に勤務することは、将来管理職を嘱望される人には良くある事ですが、岩城さんもその一人だったようです。当時のお金で 600 万で記念になるものを造って欲しいということで、重吉の詩の選定に入ったようです。御影の詩碑「夕焼」は、柏時代の作品ですが、重吉の創元社版の『八木重吉詩集』が世に出るきっかけとなった吉野秀雄と小林秀雄の出会いの折り、小林秀雄が感動したと言われる詩であり、まだ「素朴な琴」しか詩碑のなかったこともあり、誰にも愛される「夕焼」が選ばれました。しかし岩城さんは御影時代の詩つまりは『秋の瞳』から選びたいという気持ちがありました。国際児童年にふさわしい詩、教育者として子供に関係する詩を考えた時、「幼い日」が候補に挙がったのです。関係者の賛同も得られました。岩城さんが字を書き、同僚だった中学校の美術教師田中昇さんが彫刻しました。他の詩碑に比べてユニークな詩碑です。



全景

詩碑のある右側部分

作成記録

平成5年に愛好会で西宮の詩碑を訪れた時、清水嗣子さんが呼んでくれた岩城さんに、御影だけでなく夙川も重吉にゆかりがあるのかと問うたことがありますが、岩城さんは重吉が御影在住の間に、この辺にも来ているはずだと言います。神戸の御影も、隣りの芦屋もこの西宮も、かつては一つの地域(摂陽地域)として捉えられていたというのです。重吉は大正10年4月10日に『現代仏蘭西詩集』を購入していますが、著者は芦屋の詩人柳沢健です。大正7年に刊行された『日本詩集』という雑誌によく寄稿していたが、職業としては通信省に務めたり朝日新聞に引き抜かれたり、外務省に入ったり多彩な人物で、郷土でもよく知られていました。重吉は詩の歴史に深い興味をもっていたので、柳沢健の詩集にも目を止めていれば、柳沢の住んでいた地域にも興味をもって散策に訪れていたと思われる、と岩城さんは言います。岩城さんの話が終るころ、猿丸さんの友人の渋川さんも来ましたが、ライオンズクラブの一員で詩碑建立にも関係していたとの事でした。

岩城さんは詩碑「幼い日」が建立される前年の昭和 54 年に、芦屋教育研究所編(文責岩城康隆)で『詩人「八木重吉」の教師体験』を出版していて、教師としての御影時代の様子を教えてくれています。そして出版後まもなく校長として中学校に戻ります。芦屋市立潮見中学校に校長として昭和 61 年まで7年勤務しました。愛好会が平成5 年に訪れた時は60 代後半だったと思われます。その後の消息は不明ですが、岩城康隆さんは、西宮の詩碑「幼い日」の建立の大きな尽力者だったことを改めてお伝えしておきます。

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでも OK です。)

字数:2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切:なし(随時お送りください)

送り先:メール (<u>kmat27aiko@gmail.com</u>へ) か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス http://www.yagijuaiko.com/ (作成途中の部分があることをご了解下さい)

Eメールアドレス <u>kmat27aiko@gmail.com</u> (管理者小林正継)

*今号はページ数が多くなりました。『八木重吉を慕いて』を出したことで柏の詩碑建立までの日々を思い出しました。詩碑建立委員会の事務局を担当した天利武人牧師と、来年、久しぶりに柏での集まりをもち、柏市民にあらためて八木重吉と柏のゆかりをアピールしたいと考えています。計画が決まり次第、皆さんにも案内します。